

**人権週間に思う 「美しい心をもって行為せよ」**

251204

哲学者の今道友信さんが30歳の頃の話である。1950年代というから、日本も、日本人もまだ貧しかった。東大を出て、フランスで大学の講師になったが、薄給で生活は苦しめたという。晩ご飯を食べる小さなレストランで、給料日の前はいつも一番安いオムレツだけを注文した。「お腹が空いていないから」「疲れているから」と言い訳をしていたら、ある日、店の女性がそっと二人分のパンを置いてくれた。「二人前でした」と代金を払おうとすると、彼女は「黙って」と口に手をあてて受け取らない。晩年に綴った『今道友信 わが哲学を語る』で彼は振り返る。「それだけのことですが、思い出すと今でも涙が出てきます」ひどく寒い日には「注文を取り違えました」とオニオングラタンをごちそうしてくれた。その何と温かかったことか。おいしかったことか。涙をこみ上げてきた。暮らしあは惨めで、そんな思い出があるから「私はフランスという国がどうしても嫌いになれないのです」異国の地で、人は優しさに救われる。さて昨今の日本はどうか。外国人は出でていけと言わんばかりの冷たい言葉が跋扈（ばっこ）してないか。国籍は違っても、この国とともに地道に暮らす人間同士が憎悪を煽り煽られ、不安におびえる現状を憂う。今道さんの著書には、こんな言葉も紹介されている。「美しい心をもって行為せよ。世界はその時それだけ美しくなり、その美は後代に伝わる」（天声人語）